

黒田 晶子



「この道はアいつか来た道イ……」夫の歌声が聞こえてきます。「アアア（ここで「心」が「音楽」を上まわる）そうだよ、ハマナスの花が咲いてるウ」白秋のアカシヤはいつのまにかハマナスに。夫は自分が替え歌の名手であることにまだ気づいていません。石狩浜に、またハマナスの季節がやってきました。このハマナスは丈が低くて、ことに石狩川河口の、灯台先の植物保護区一帯ではほとんどカーペックト状です。砂に結び留めたりポンのよるな花に、石狩の人たちは「ハマナスはこれでなくっちゃ」などと、勝手に鼻をたかくしていますが、これも吹きさらしの土地に住む、同居人のひいき目でしょうか。

ハマナスには、小さな、しかし鮮か

な思い出があります。癌で死の床にある人がいました。お見舞のおり「こんどハマナスの花を持ってきますからね」と約束したのが、次にお会いするのはお葬式の日になってしまい、私は白いハマナスを一輪、棺の中のその人の髪に挿すことになりました。「あのとぎ約束したハマナスよ」と告げると、その方はうなずいてくれるではありませんか。「やっぱり、覚えてたのね」と

思ったとき、お堂の床が多勢の参列者の歩みにつれてかすかにきしんでいるのに気づきました。床のきしみが棺に伝わっていたのです。肉の緊張から解かれた身は、それほど軽くなっていったのでした。ヘデモ私、少シモ不思議ト思ワナカッタVひとの知覚のどこかには、こんな意識の谷ひだがあるものですね。

こんど石狩町では、河口先端の46haをハマナスの丘公園として整備することになり、私たち緑化推進協議会の七名は去年の六月から九月、該当地域の植物調査を行いました。なにしろ風の強いところで、調査用紙がもみくちゃになるほどでしたが、何とか百五十種の植物名リスト、主要海浜植物および湿地植物の分布図、地形断面と植生相関表、標本、写真をつくることができました。考察・結論として、この貴重な海浜の自然草原と砂丘をふくむ荒渚とした景観はできるだけ現状を保存し、

学習と休憩所をかねた観察センター的な施設を、区域の外側につくることを提案しました。

計画素案ではアスファルト舗装道路、三軒のトイレつきあすまや、展望タワーなどが盛りこまれていましたが、その後の話し合いと協議の末、道は旧来の管理道路を最大限利用した、幅1mのダスト舗装、トイレなし休憩所一ヶ所他に観察センター建設という線におちついて、町は現在予算計上準備中です。

この調査を通して私たちはあらためて自然が、いろんなものをこたつにためこんだ大袋のようなものではなく、実に整然とした配列であることに感動しました。波打際から、砂丘、砂丘のかげ、安定した内側の砂丘、砂丘間の低湿地、そして川岸と、植物たちはわずかな変化に応じてクッキリと生存の構造をみせているように思われました。一方それでいて思いがけない、その場において身をかがめなければ見えない谷ひだをゆたかに秘めているのです。葦のなかの今まで誰も知らなかった小沼、午後のひつじの刻、水面にヒツソリと咲くヒツジグサ、女性調査員から石狩湾の波音にも負けない大喚声が起こった海蘭の大群落、そして丈の20倍にも及ぶイソスミレのけむるような細根……

そして花が散り葉が消えたあと、人けない野は、キタキツネの骨をまっ白

に洗い曝し、チドリ卵の破片を砂にかえし、こうして痕跡と予感にみちた無へとかえることで、一そう空に近くなるのです。

「何とかかなさきやき事が神について聞かされたのだらう」と聖書のヨブ記にあります。「しかしその力ある雷については、だれが理解力を示せようか」

私が住みついて十年のまに、石狩の海水浴場は季節を問わず車のタイヤ跡だらけになり、砂丘にはホットケーキに二またのフォークを押しつけたような溝がえぐられ、砂丘のかたちさえも変わりつつあります。天然の防風林であった柏林も、港の開発、砂利採取でそここに風の通りみちがあいいています。

「力ある雷」を、私たちはあまりにも久しく忘れていたのかもしれない。

黒田晶子（くろだ あきこ）

一九四二年中国天津生れ。国際基督教大学卒。訳書「鳥たちをめぐる冒険」他多数。「森なしには生きられない」などにエッセイ掲載。石狩町在住。